

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ウルメイワシ

学名 *Etrumeus teres*

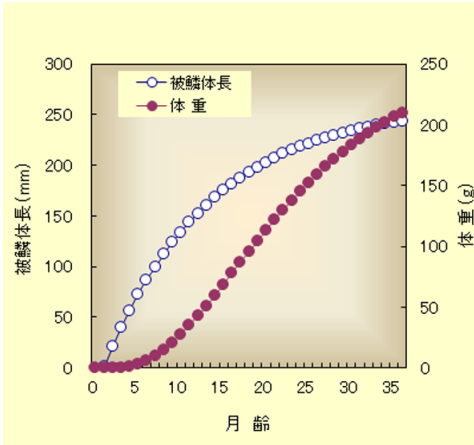
系群名 対馬暖流系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 3年
成熟開始年齢: 1歳
産卵期・産卵場: 九州周辺水域では周年、日本海北部では春～夏
索餌期・索餌場: 夏～秋季、日本海西部～東シナ海
食性: 稚魚期・成魚期ともカイアシ類、十脚類、端脚類
捕食者: 大型魚類やほ乳類、海鳥類、頭足類

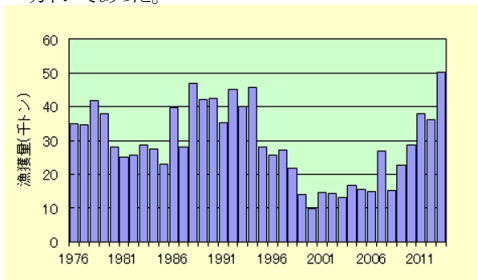


漁業の特徴

ウルメイワシ対馬暖流系群は、東シナ海区(福岡県～鹿児島県)では中小型まき網や棒受網により、日本海西区(福井県～山口県)では大中型まき網、中型まき網、定置網などにより漁獲され、日本海北区(石川県・富山県)では定置網などで混獲される程度である。漁獲が多いのは、東シナ海区と日本海西区である。なお、対馬暖流域では、沿岸での釣りや刺網による漁獲はほとんど行われていない。

漁獲の動向

東シナ海区の漁獲量は1980～1997年には0.7万～1.6万トンであったが、1998年から2000年にかけて減少した。2001年以降は増加に転じ、2013年は3.6万トンであった。日本海西区の漁獲量は1980年代後半～1990年代前半に多かった。2013年は1.4万トンであった。日本海北区では、ウルメイワシはあまり漁獲されず、2013年の漁獲量は0.05万トンであった。



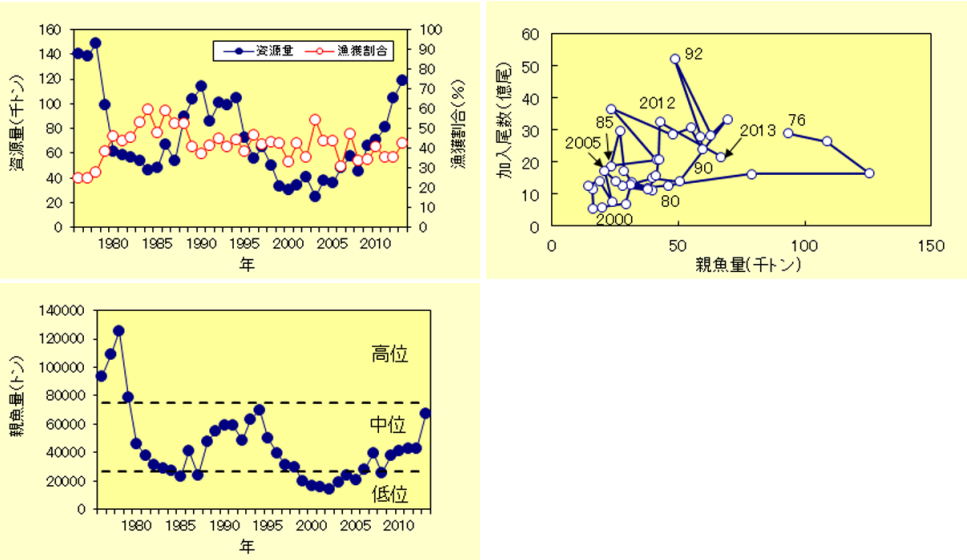
資源評価法

月別漁獲量と体長測定資料を用いたコホート解析により資源量を推定した。

資源状態

資源量は、1970年代後半～1980年代前半に減少し、1980年代後半～1990年代前半に増加した。その後、2000年代前半まで再び減少した。2003年以降は変動しながらも増加傾向にある。2013年には11.9万トンと推定された。これより、資源動向は増加と判断した。親魚量と加入尾数には正の相関が認められるが、親魚量が多くなると加入尾数は頭打ちになる傾向がある。2013年の親魚量は6.7万トンでBlimitを上回ったが、加入尾数が頭打ちとなる親魚量7.5万トンを下回ったことより、資源水準を中位と判断した。





管理方策

資源管理の基準となるBlimitは、加入量の上位10%を示す直線と、再生産成功率の上位10%を示す直線の交点に近い1984年の親魚量2.7万トンとした。2013年の親魚量は6.7万トンでBlimitを上回った。2013年以降のRPSを近年5年間(2009年～2013年)の中央値で与え、それに対応するFmedで漁獲すると、2015年以降の資源量は2013年よりもやや減少する。ABClimitはFが基準値(Fmed)で、RPSが近年5年間の中央値で推移するとした時に計算される漁獲量とした。予防的措置としてABCTargetは0.8Fmedとした。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	42千トン	Fmed	1.02	40%
ABCTarget	37千トン	0.8Fmed	0.82	35%

- 漁獲割合は、漁獲量÷資源量
- F値は各年齢の平均

資源評価のまとめ

- コホート解析により資源量を推定した
- 資源水準は中位、動向は増加
- 2013年の親魚量は6.7万トンで、Blimit(2.7万トン)を上回っている

管理方策のまとめ

- 近年5年間(2009年～2013年)のRPS中央値に対応するFmed以下で漁獲し、親魚量の維持を図ることが適当
- 資源を安定して利用するためには、親魚量を一定以上に保つことが有効

執筆者: 安田十也・福若雅章・黒田啓行

資源評価は毎年更新されます。